

たんぽぽとまほうつかい

渡部 静

今年も、はるがやってきました。草むらの生きものたちはみんな、あたたかなはるがだいすきです。とんだりはねたりうたったりして、はるをかんげいしました。草や木もせのびして、たいようのひかりを体じゅうにいっぱいあびています。

そんな中で、ひとりだけ、うつむいているものがいました。それは、いっぽんのたんぽぽのおかあさんでした。ふわふわしたわたげのこどもたちをかかえて、じつと下をむいています。

たんぽぽのこどもは、大きくなると、かぜにのってたびに出ます。そのとき、どの

かぜにのってたびに出るかは、たんぽぽのこどもがじふんできめなければならぬのです。しかし、このおかあさんのこどもたちは、まだだれも、どのかぜにのってたびをするのかきめていませんでした。

おかあさんはいきをつくと、こどもたちいきましました。もうなんかいいも、こどもたちにしたしつもんです。

「おまえたち、いつになつたら、のつていくかぜをきめるんだい？」

でも、かえってくるこたえは、いつもおんなじです。

「だって、ぼく、どのかぜがいいかわから

ないよ」

「きつとわたし、うまくかぜにのれなくて、水たまりの中におちてしまおうわ」

「わたしは、ありにつかまって、はこぼれてしまいかもしれない」

みんな、こんなちようしです。おかあさんはまたためいきをつきました。

「そんなこといったって、いつまでもいっしょにいることはできないんだから……」

おかあさんがいうと、こどもたちはみんなだまってしまいました。たびに出なければいけないことはわかっているのです。ただ、おかあさんやきょうだいとはなれて、たった一人で生きていくことが、こわくてしかたがないのでした。

あるはれた日のことです。その日はとてもあたたかく、おひるねにはちようどいいてんきでした。なので、タンポポのこどもたちはみんなねむっていました。でも、おかあさんはねむれません。こどもたちのことと、ずっとなやんでいるのです。

「なんだかこまっているようですが、どうなさいましたか？」

とつぜん、たんぽぽのおかあさんのうしろでこえがしました。びっくりしたおかあさんがふりむくと、そこには、つえをもつ



© Akemi

た男の人がしゃがんでいて、おかあさんのほうをやさしい目でじっと見つめていました。

「なにかできることがあったら、おてつだいますよ」

男の人はそういうと、つえを小さくふりました。するとどうでしょう。なにもなかったところから、ぱっときれいなちようがとびだしたのです。ちようは、しばらくあたりをとびまわっていました。やがてどこかへいってしまいました。この男の人は、まほうつかいだったのです。

たんぼほのおかあさんは、この人ならなにかいいことをおしえてくれそうだとおも

いました。

「ええ、じつは……」

おかあさんは、こどもたちのことをまほうつかいにはなしました。まほうつかいはだまっとうなずきながらはなしをきいていましたが、はなしがおわると、

「たんぼぼさん、わたしはあなたとおなじことでなやんでいたおかたを、きよ年も見ましたよ」

と、にっこりわらっていました。

「それで、そのかたはどうされたんですか？」

おかあさんがきくと、まほうつかいはつえでとおくの小さなおかをさしました。そこにはたくさんのおたんぼぼがさいているのでしよう、まるでみどりの草むらのなかに、大きなきいろのじゅうたんをしいたようになっっていました。

「わたしがまほうでかぜをふかせて、そのおかたのこどもさんたちをみんなあのおかにおくったんですよ。あのおかなら、みんなが花をさかせられるとおもいましたね。このとおり、みんなりっぱな花をさかせましたよ」

「……」

「もしよければ、あなたのおこさんたちも、わたしがいいばしょにはこんでさしあげま

すよ」

おかあさんは「はい、おねがいます」といおうとして、だまっとうしました。まほうつかいはにこにこしながら、やっぱりだまっとうおかあさんを見ています。

(もし、このまほうつかいさんのいうことをきいて、まほうのかぜでこどもたちをたびに出すことにすれば、こどもたちもみんな花をさかせられるし、わたしももうなやむことはないわ。でも……)

おかあさんは、ねむっているこどもたちをじっと見つめました。

(このこたちは、それでいいのかしら……)

そのとき、こどもたちがすこしずつ、目をさましてはじめました。小さなこえで、ひそひそとはなしをしています。

「ね、いいかげふいたかな？」

「ねてるあいだに、とおりすぎちゃったかな？」

「きようはもうふかないのかな。今日こそ、いいかぜを見つづけるぞ！ っておもったのになあ」

「あの人、だれかなあ。かぜがなくなるから、ちよつとどいてほしいんだけどなあ」

「あそのの、たんぼほのさいていないところへいけるかぜがふかないかな。ぼくはそこで花をさかせるんだ。みどりいろの中に、一つだけきいろがあるなんて、きつとびつくりするよ」

こどもたちのひそひそばなしは、だんだん大きくなっていきます。おかあさんのきもちも、それにつられてかたまっていきました。

さいこのこどもがおきだして、

「わあ、ねぼうしちゃったなあ！ かぜはまだふいてないよね？」

といったとき、おかあさんは、まほうつかいにむかっていたいました。

「ごめんなさい。やっぱり、おことわりします。たしかに、まほうでよいところにいかせたほうが、みんな大きな花をさかせることができるかもしれません。しかし、わたしのこどもたちはみんな、じぶんの力で、じぶんだけのかぜを見つけようとしていきます。どんなにおそくても、きつとみんなが、じぶんだけのかぜを見つけてたびだつ日がくるでしょう。わたしはそれをしんじます。だから、まほうはいりません」

いいおわたったあと、おかあさんは、まほうつかいがおこるか、がっかりするかとおもって、すこしどきどきしていました。で



© Akemi

も、まほうつかいは、やっぱりここにこわらっていました。

「ええ、きつとことわられるだろうとおもったのです。あなたのこどもさんたちのおいっしょうけんめいなおしゃべりがきこえましたから。もし、あなたがあれをきいてもわたしにおねがいするようであつたら、わたしはきつとがっかりしたでしょう。ほんとうはみんなじぶんの力でじぶんのみちを見つのがいちばんいいのです。それをわかっておられるおかたがまだいらっしゃるとわかって、わたしはあんしんしました」

そして、まほうつかいは、

「こどもさんたちがみんな、じぶんだけのかぜをみつけれられることを、とおくからいのっていますよ」

というど、けむりとともにぱつきえてしまいました。

そよそよと、かぜがふいてきました。小さいけれどやさしい、いいかぜです。

こどもたちのうちの一人が大きなこえでいいました。

「きめた！ わたし、このかぜにするわ」
そして、かぜにひらりととびのりました。

「おかあさん、みんな、げんきでね！」

たんぼほのこどもは、げんきにたびだつていきました。ほかのこどもたちも、あとからあとからふいてくるかぜを見つけてはたびだつていきます。

「ぜったい、いちばん大きな花をさかせるからね！」

「ほくのこと、わすれないでね！」
それを見おくるおかあさんは、もうかなしそうなかおはしていません。こどもたちがたびだつていくのを、ほこらしそうに見ています。

つぎの年のはる。

草むらのたんぼほは、まるで小さなお日さまをばらまいたようでした。

(わたなべ・しずか／国文専攻二年)

夏は

次郎垣内智子

ぎらぎらの太陽の真下
あつつうーって叫びながら登る
たちこぎの坂道が、夏

氷がとけてカランって鳴る
汗だくのコップと
薄まった麦茶が、夏

熱帯夜の次の次の日の夜
柔らかい風が窓から吹き込んで
涼しいねえって言う誰かの声が
無性に嬉しい、夏

そうして夏を感じてみるけど
夏は常に駆け足で
気が付けば
底の擦れたサンダルで
木陰を歩いてる

見つけたのは
道端にひっくり返った蟬の静けさ

ああ夏が終わる

(じろろがきうち・ともこ／英語文化系一年)

Blue day

渡部 静

カナリヤみたいなの黄色い羽で
可愛く空を飛んでみたい
好き勝手に雲をちぎって遊びたい

とめどなく涙が溢れる日には

イルカみたいな柔らかい尾びれで
元気に海を泳いでみたい
魚の群れを追い掛け回して遊びたい

頬を伝う涙がたまらない日には
心だけでも逃がしてあげたい
あの青の果てに

(わたなべ・しずか／国文専攻二年生)



日常の中で

青山礼美

のんびりのんびり
それでいい？

慌ただしい人込みの中
騒音を聞いている
いつの間にか

空を仰ぐことさえ
無駄な気がしていた

いつも焦りを感じて
時間は

誰だって平等に過ぎ去るのに

遠くに雲を見た

風の流れと共に旅をする
ゆっくりとしたものを

心に留めておこう

青空に浮かぶ真っ白な雲は
焦りを知らないから

のんびりのんびり

それでいい

忘れてしまったら見上げてみて
大切なものがみつかるはずだよ

(あおやま・あやみ／日本語文化系一年)

詩

あつ、「おはなしレストラン」だ！

——授業「読み聞かせの実践」 —— 幼保園のぎ・乃木小学校での実践を終えて——



マユーあき

二〇〇五年度に、松江市立病院小児科病棟でボランティア活動として始まった絵本の読み聞かせは、翌年度、そこで積み上げた経験をもとに、文学科の正規の科目「読み聞かせの実践」として立ち上がった。知識伝達型の従来の座学とは異なる、文学科では珍しい、キャンパスを飛び出している実践型の授業である。

そして今年四月、島根県立大学短期大学部松江キャンパスでは、学科再編により総合文化学科が新たに誕生し、この「読み聞かせの実践」も、新学科の言語文化に関わる授業の一つという位置づけのもとで、新しいスタートを切ることになった。男女共学化により、初めて若武者（イケメン？）四名も参加して、総勢二十九名による実践の始まりである。

学生たちのステージとも言うべき実践の場は、前述の松江市立病院小児科病棟と、二〇〇六年度から活動を始めた松江市立幼保園のぎに、今年度新たに松江市立乃木小学校が加わり、朝の読み聞かせボランティアとして実践する機会に恵まれた。これには、本学と幼保園のぎ、乃木小学校の三者連携に関する協定の締結が後押しとなった。

さて、おそろくここで、「なぜ、保育が専門でもない学生たちが子どもたちにも読み聞かせを？」と疑問に思われる方もいらっしゃるであろう。しかし、保育が専門ではないからこそ、学生たちにとって子どもたちと触れ合う場は必要だと思う。親としてだけでなく、地域社会の一員として、子どもたちの健やかな成長をみんなで支え合っていることが求められる時代である。社会に出る前に、自分もかつてそうであったけれど、今はもう大分忘れてしまっ

たこの「小さい人」たちのことを、交流の体験を通して思い出してもらう意味は大きいのではないだろうか。

子どもたちへの絵本の読み聞かせを学生たちに、と思いついたもう一つの理由は、この実践の裏方の一人である筆者自身の、ある小学校での朝の読み聞かせボランティアで得た経験にある。読み聞かせを始めてから、不思議なくらいに心地よい感覚を時々味わうことがあった。絵本を自分なりに消化して、お話に対する具体的なイメージを細かく頭に描きながら読むと、紙に書かれたお話が立体的に立ち上がり、子どもたちをすっぽり包み込んでくれる。さらに、読み手の自分の中でも、絵本の言葉が紡ぎ出す世界への感応力が呼び覚まされ、生き生きとした気持ちになってくるのである。優れた絵本の力を介して、子どもたちの心と自分の心が繋がりが、とても満ち足りた幸福感を感じる事ができる瞬間である。

学生の言葉の力が弱くなってきたいと感じずにはいられないこの頃、彼らが子どもたちへの読み聞かせを体験することは、人と人を繋ぐ言葉の力を、そして、言葉に対する生き生きとした感覚を、もう一度取り戻すことに通じていくのではないだろうか。自らの経験から来る自信はあるものの、正直言って、これは直感以外の何物でもなかった。しかし、幸運にも、この直

感の良き理解者を得ることができ、裏方二人で、現在まで何とか学生たちの舞台を支えているところである。

学生たちの読み聞かせの活動は、昨年より「おはなしレストラン」という名のもとでおこなっている。宮澤賢治は、童話のことを「すきとおったほんとうのたべもの」と書いているが、そ



のことも多少意識してのネーミングである。また、聞き手の子どもたちだけでなく、読み手の学生たちにとつても、この「ほんとうのたべもの」が豊かで力ある言葉への気づきとなり、ひいては心豊かな人生への糧となることへの願いも、密かに込めてある。今年、この活動名をプリントした揃いのTシャツを着て実践に出

かけたこともあり、訪問先の子どもたちから、「あつ、『おはなしレストラン』だ!」と、声がかかるようになった。

さて、長々と「読み聞かせの実践」について述べてきたが、そろそろ、今年度参加した学生たち自身に登場してもらおう。以下は、幼稚園のぎと乃木小学校での実践を終えたところで、彼らが綴った感想文である。学生たちがこの実践から、それぞれにどんなことをすくい取って自分のものにしてくれたか、読者のみなさんに読んでいただければ、裏方として大変嬉しく思う。

なお、松江市立病院での実践については、活動

時期が他の実践よりも遅いため、感想がこのたびの記事に間に合わなかったことを付け加えておく。

(まゆー・あき／英語学)

まさかの読み聞かせ活動

一年 稲角 静

まさか自分が読み聞かせ活動をするなんて思ってもいなかった。どちらかというと、子どもは苦手だし、人の前に立つことが苦手だからだ。だから、ちょつと挑戦してみよう! という感じでこの授業をとった。

そんな私が、いきなり話の長い「おふろだいすき」を幼稚園のぎ用を選んでしまった。読むのは大変だったが、練習して読めば読むほどこの絵本が大好きになった。

しかし、実際幼稚園で読み聞かせをしてみると、やはり話が長いので子どもたちが静かに聞くには少し難しかったようだ。そこで、「おなら」という本に変えることにした。すると子どもたちは絵本をチラッと見ただけで爆笑しワクワクしていた。その興奮を静めるのが本当に大変だった。どういふ風に注意すればいいのか、さっぱり分からなかった。この時、さすが幼稚園の先生は私たちとは違うなあ、と感じた。

子どもを扱う大変さを実感できた。だけど、元気一杯の子どもたちと触れ合えて私も元気になった。

乃木小学校での活動は朝早くから少し大変だと思っていたが、子どもたちには会うと全くそう思わなくなった。小学校の子どもたちも、元気がよくて真剣に絵本の読み聞かせを聞いてくれた。

小学校で読んだ絵本「おまえうまそうだな」は、私が中学校三年生の時に出会った絵本だ。あの時からこの絵本が大好きだ。だから、一人でもいいので私の読み聞かせが記憶のなかに残っていてくれたら嬉しい。

私が実践活動よりも緊張したのは、大学のみんなの前での練習だった。正直に言うといちばん嫌だった。あのみんなの鋭い視線は忘れられない。しかし、お互いに相手の読みを聞いて良い点や直したらいい点を書きだすことは良いことだと思う。あの感想はとても参考になった。他の人の読みを聞けるこの練習はとても大切なことだと実感した。

先生方やみんなの感想をもとに家で練習した。各班ごとに考える幼稚園のぎでの手遊びやゲーム。考えるのはけっこう大変だった。自分たちのオリジナルゲームを考え出したりして、準備しているときも楽しかった。

読み聞かせをするようになってか

ら、本屋さんに行くとなぜか自然に絵本のコーナーに立ち寄ってしまうようになった。小さい子に不思議な目で見られる。

読み聞かせは、やればやるほど読み聞かせの魅力にとりつかれてしまう。授業の読み聞かせがあつてよかった。そして、読み聞かせに挑戦してみても正解だった。

もし、私が小学生の親になった時は、保護者として読み聞かせ活動に参加しようと思う。

(いなずみ・しずか／英語文化系一年)

超サイコー

一年 北村寛大

この授業はとても楽しそうやし、子どもたちとふれあえる機会やからやるしかないと思い、とることにした。

正直授業時間ありすぎやろ、と思っていたが、とても満足感の得られる授業であつた。おそろいのTシャツにかわいい名札。大学生になつて、ここまでするか、と初めは思っていたが、いもんだと思える自分もいた。

とにかく楽しむことが一番のこの実践では、笑顔がたえなかつた。楽しんでくれている子どもを見てみると、自然と笑顔になつてこちらまで楽しく感



じた。

絵本を読んでいるときも子どもたちの反応をみながらドキドキして読んでいたが、仲間同士でふざけあつて楽しくてテンションが上がるのとはまた違う楽しさがあつた。スポーツをととても集中してやつたときに鳥肌が立つのだが、この実践でも何度か鳥肌が立ったので、どちらかといえばスポーツをしたときの楽しさに似たものを感じた。実家の近くの姉の家に子どもがいて、遊びに来たときは一緒にたくさん遊んでいたの子どもが大好きだつ

た。そしてこの実践を通してよけいに子どもが好きになつた。一緒に遊ぶことしか子どもとふれあえないと思つていたのだが、絵本を通して子どもたちとふれあうのがここまで楽しく充実したものだと思つていなかった。

幼稚園の園長先生が、子どもは絵本で育つ、と言つておられた。初めて聞いたとき、そんなわけないわ、と思つていたが、読んでみるととても集中していたので、子どもに与える影響の大きさを肌で感じる事ができた。

何人かの幼稚園の先生に、保育士の道もいいかもしれへんね、と言われたときはとてもうれしかった。なにかまた別のきっかけがあればその道をめざすのもいいかもしれない。今回の経験でその道を目指してもいいかな、と思つてしまうほど、この実践はいいものである。

普通に大学生活を送っていると経験できないことができたので、この実践で知つたことや経験したことを無駄にせず、今後に活かしていきたいと思う。めつたに経験できないようなことができるこの読み聞かせの実践を、今後もずっと続けていってほしい。子どもが苦手でも好きになれる授業だから。

姉に子どもがいるといったが、その子たちとうちとけるのにそんなに時間はかからなかつた。だがその子たちの友達はなかなかうちとけてくれなかつ

た。幼稚園ではみんながみんな人見知りをしていない、とは限らないのでどうなることかと心配していた。が、初め人見知りする子もちょっとすると寄つてきてくれた。人見知りする子への接し方もわかつたので、よけいに子どもが好きになつた。

でも実は高校の頃、子どもが嫌いな時期があつた。それをなくしてくれたのが姉の子どもたちである。そして好きという思いを強くしてくれたのは、幼稚園の子どもたちと乃木小の子どもたちである。本当にいい経験ができた。(きたむら・ひろお／英語文化系一年)

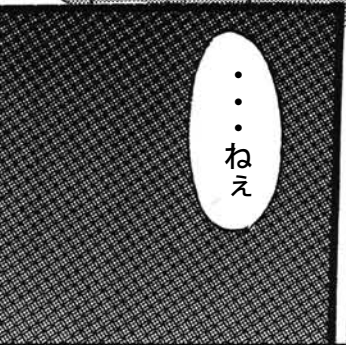


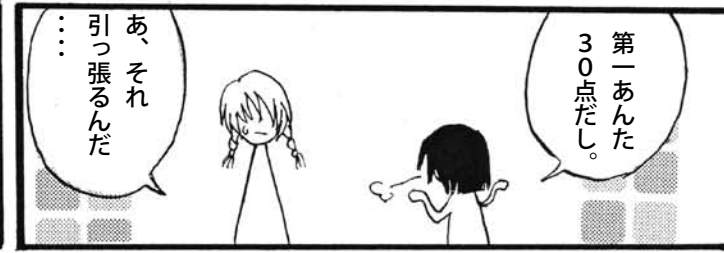
■実践を終えて感想を書きます (乃木小学校図書室にて)

変わらないもの

金具 サビ

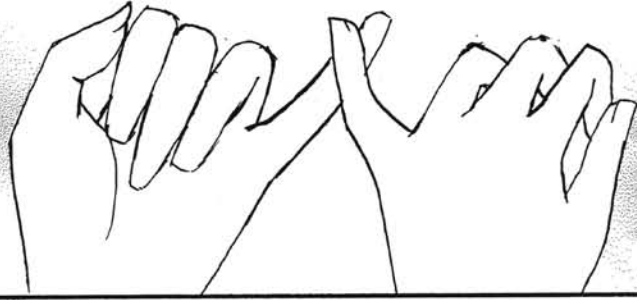
—1947年、夏・・・





忘れないよ

約束ね



—2007年

あれからもう六十年
私は引越してしまっ
て彼女とは会ってない

結局
日和という名の歌手の
話も聞かなかった

時代はすっかり
変わってしまった

街並みも

人も

私たちが生きたころと
は比べようもない

あの空き地も
もうなくなっていました……

彼女も
変わってしまったらう
か？

歌手の夢など
とくに捨てて、

別の人生を
歩いたのだろうか……

……移り行く季節の中で

変わらない大切なもの

どんなに時間が流れても

変わることのない想いがある

山梨県立中央大学

ああ、
叶うのなじ...

どうか話して
聞かせてほしい

変わらぬあなたの
夢の続きを.....



島根って

どんなイメージ？

根間南央美

一年生は入学してからもう半年になる。県外から島根に来た方たちへ。——今さらだけどよろこぞ島根へ。一人暮らしの人ももう島根という環境に慣れただろうか。

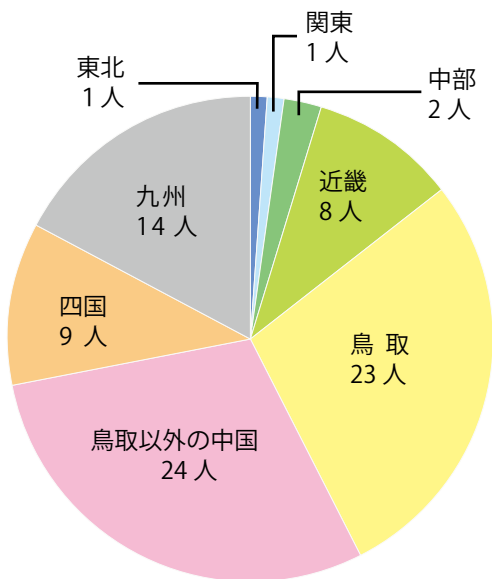
ところで、「島根」という県は、周りから一体どういう目で見られているのだろうか。あるトーク番組で芸能人が「この間、鳥取に行っただんですよ」と言っていた。すると司会者が「あそこって、離島あるよね」と一言。

いやいやそれはこっちだよとツッコミを入れたくなる。島根には「大きな砂丘がある」と思い込んでいる人もいるらしい。場所の分かりづらい県ナンバーワンの称号まで頂いてしまった。

……と、悲しくなってくるような事実ばかりを突きつけられ、地元民はため息ばかりだが、そもそも、他の県の人は島根についてどう思っているのだろうか。

県外出身学生を対象にアンケートをとることにした。八十二人の学生からの回答を聞いた。

まずは「アンケート回答者の出身地方分布」のグラフを見てほしい。やはり半数以上が中国地方出身であ



アンケート回答者の出身地方分布

る。その中でも鳥取県出身者の数は全体の二割となっている。北は山形から南は鹿児島まで、さまざまな県からの大学に來ていることが分かった。中には福岡、広島などの都会から來た人も。

また、「この大学に入学する前に島根県を訪れたことがあるか」との問いには、五十五%の学生が「ある」と答えた。鳥取の人はほぼ全員が「ある」だった。親戚が島根にいるという学生も多いらしい。

気軽に県を飛び越えられる「近さ」というのは、鳥取と島根との間ならではじゃないかと思った。

「島根に來る前のイメージ」の質問にはグサリとくるものが多かった。

一番多かったのが漢字二文字で「田舎」。「位置も分からなかった」という意見もちらほら……。しかし最近では、ドラマ「砂時計」などの影響でちょっとだけ島根県の存在が認識されるようになってきている。このドラマを挙げた人も多かった。

また、島根県は「過疎化で実際に教科書に載っている」らしい。確かに、私が小学生のときに使った社会の教科書には過疎化の例として島根県が載っていた。しかもご丁寧に東京というより比較されていた……。

「コンビニはポプラしかないと思っただ」という意見も。ローソンのほうが店舗数が多い気がするが……。それにしても、最近ファミリーマートが急速に普及してきた。八月には乃木駅前にもオープンした。

よく驚かれるのが、現在店舗数日本一の「セブンイレブン」がないことだ。しかし、セブンイレブンは特定の地域へ集中的に出店するという形を取っており、まだ未出店の県は島根県以外にも多くあるそうだ。

太平洋側の県の人に多かったのが「寒そう」。島根の寒さは本当に厳しいので、寒さ対策は万全にしてほしい。大雪で電車が止まるというハプニングは毎年必ず起こっている。

天候関連では「天気予報でよく雨のマークが出ている」というのがあった。山陰の天気は特に変わりやすい。「弁当忘れるも傘忘れるな」という言葉があるくらいだ。傘は島根での生活には必需品だ。

“シンジコ” 書けますか？

突然だがここで一つ問題を出そう。

“シンジコ”を漢字で書いてみてほしい。きちんと書けただ

ろうか。なぜそんな問題をいきなり出したかというと、「初めて島根を訪れたときの印象」を尋ねたとき、「シンジコ」を挙げた人が多かったのだが、その大半が漢字を間違えていたのだ。

一番多かったのが、というか間違えた人全員が「穴道湖」と書いていた。正しくは「宍道湖」。書いてみてはつととなった人もいるのではないだろうか。うかんむりの中は「八」ではなく、「六」。これでもう間違わない……はず!?そんな宍道湖だが、「すごい」「きれい」「大きい」と好評だった。

松江駅周辺はまだ都会っぽさがある。「松江は都会っぽい」とか「松江駅周辺は近代的だ」という意見もあった。しかし「やっぱり田舎」という意見はさらに多かった。

また、「人が優しい」「空気がおいしい」という長所を挙げた回答もあった。

自動改札機がない!!

「島根に來てびつくりしたこと」については本当に多くの回答をいただいた。その回答の中には思わぬ発見もあった。

電車事情については驚いた人も多かっただろう。まず、「自動改札機がない」。——自動改札にするほど利用者がないのが現状だ。しかし、人から人への手渡して、ぬくもりがあつていいではないか!



© Kimiko

そして、「電車のドアは自分で開けなければならぬ」こと。特急以外は全部自分で開けなければならぬ。ポタンで開けるタイプがほとんどだが、手でこじ開けるタイプのものもある。ドアが重くてなかなか女性には開けにくい。ドアが開くのをひたすら待っている人を見ると笑ってしまう。

交通事情もさることながら、天候、特に湿気に悩まされている人も多かった。「何だこの湿気は!」「カビが尋常でないくらい生える!」という叫びがいくつもあつた。特に梅雨時は湿度計の針が振り切れることが多い。「快晴の日を心待ちにするようになった」と

いう回答も。冬は冬で結露に悩まされる。カビ対策は一年中必要だ。

方言については鳥取出身の人も驚いている。特に語尾につくもの。「〜だが」「〜だに」「〜しちよお」「〜してござん?」などの言葉、鳥取はおろか、県内でも通じないところがあるらしい。

また、相槌を打つときの「あげあげ」「そげそげ」。この言葉、奈良時代の名残である。このように出雲弁には、宮中や仏教で使われていた言葉、日本や中国の故事にちなんだ言葉、古典文学に出てくる言葉がたくさん残っている。

出雲弁を「かわいい」と形容した人



© Kimiko

がいた。喋っている方にしてみれば、「そうか?」と首をかしげる。でも先に述べたことを思うと、コンプレックスが軽減され、少し知的な言語にさえ思える。堂々と胸を張って訛るうではないか。

最初は「分からない」けど、だんだん理解していき、自分でも出雲弁を口にするようになる。そこまできたら、染まった証拠だ。

二重人格!?な県民の特徴

人柄については「優しい」「おおらか」「ほめ上手」など、人柄の良さがうかがえる回答が多かった。しかし、「車の運転が荒い」と、車のハンドルを持つと人格が変わるのも県民の特徴なのか。「もつと歩行者を大切にしてほしい」と嘆く声があつた。車を運転する学生も多いと思うが、どうか安全運転で。しかし、車がないと移動に困るのも島根の特徴だ。

回答の中に、「出雲時間」の文字を久しぶりに見た。ここには「出雲時間」なるものが存在する。「五時に短大に来て」と言われれば、その「五時」は家を出る時間なんだというのが「出雲時間」だが、最近は通用しなくなり(当たり前なことだ)、あまり聞かなくなつた。おおらかさゆえのものだと思つたが、時間はやはり守るべきである。

「今は島根をどう思っているか」については、多くの人から「住めば都!」「第二の故郷になりそう」という嬉しい回答をいただいた。また、「伝統をこのまま受け継いで観光地として発展して欲しい」というありがたいお言葉も。

しかし、気候の変化についていけない人も多く、体調を崩したという回答もあつた。気候についてはどうしようもないので、慣れるしかない。これから冬に向けて気温はぐっと下がっていく。特に島根デビューして間もない一年生は、体調管理に十分注意してほしい。

「乃木と松江駅周辺の違いが激すぎる」という意見もあつた。乃木は坂が多く、緑も多いが、松江駅周辺は近代的なビルが立ち並ぶ。短大から三十分程度自転車を走らせれば松江駅に着く。松江駅周辺は店も多く、便利どころだ。さらに自転車を走らせれば歴史的な町並みに変わる。

松江の魅力は、目まぐるしく町並みが変わつてゆくところにあるのではなにか。「もつと探検したいと思つた」という回答を見て、なんだか自分も、もう少し松江を探検してみようと思つた。

(ねま・なおみ/文化資源学系一年)